

札幌市緑の審議会
第5回緑の基本計画部会

前回の部会・審議会のとりまとめ

平成 22 年 3 月 1 日

第 61 回審議会のとりまとめ

平成 21 年 12 月 22 日に開催しました第 61 回札幌市緑の審議会において、札幌市緑の基本計画の中間報告書に関する各委員からの意見概要は以下のとおりです。

「協働による取組みの指針（活動事例をもとに）」に関すること

自分が何かをしようとしたときや、どのようにアクションを起こしたらいいのかというときに、「協働の取組みの指針」の参考になりそうなところがなかなか見つからない。これまでの成功事例の流れを載せた方が「活動事例をもとに」という言葉に合う。

例えば、自分の勤めている企業が活動しようとした時に参考になる事例、大学など専門機関が活動しようとしたときに参考になる事例があるとよい。

これまでの 10 年間の成果として、子どもたちへの環境教育の実践があったと思うが、その子供たちが大きくなってみどりの活動に携わるようになった時、事例がありすぎると、新しい発想の妨げになるのではないか。あくまでも道しるべとなる部分で留めておくことも必要ではないか。

事例が細かすぎるという意見はもっともだと思う。例えば、ネットワークの核となる団体はこことか、コーディネートしている団体や機関の相談窓口があれば分かりやすい。

40 ページ以降のボリュームが多すぎて内容がわかりにくい。また、支援メニューについても、内容の説明が簡単にあるとよい。さらに、それぞれのケースごとの相談窓口の一覧表の記載が必要ではないだろうか。

みどりという大きな話なので、やはり窓口案内は必要である。

担い手の役割の文章がほとんど同じ事を言っている。40 ページで役割について全部言っているのであれば、わざわざ取組ごとに載せる事もないように思える。

取組みの指針は道しるべを示す程度に絞って、ガイドブックのような別立てのものが必要ではないだろうか。

「活動事例をもとに」の事例はいくつかに絞って、後々、別冊にできるようなつくり方で最後に事例や連絡先などのページを設けてはどうか。

その他

みどりを利用する人の立場で、ソフト面の利用しやすさをもう少し入れていただきたい。

農地をどのように守るかを考えていかなければならない。

全体的に環状グリーンベルトの内側の話に収れんしてきているように思うが、地球環境、低炭素社会、生物多様性といった大きなテーマに対して、環状グリーンベルトやコリドーに課せられている役割としてはあまり大きくない。札幌市域の多くを占める南区の森林について、市と道と国などの行政機関同士の連携をもっと強く打ち出していいと思う。

全体的に見たときに「みどり」なら何でもいいととられる可能性がある。

一般的な視点からいうと、文字よりも写真が多い方がありがたい。

緑の基本計画を知るために、入り口となるハンドブック的につかえるものがあると市民も親しみやすい。

現計画の数値目標（1 人当たりの公園緑地面積など）の取扱について工夫が必要である。

第4回の部会のとりのまとめ

平成21年12月10日に開催しました第4回緑の基本計画部会において、札幌市緑の基本計画の中間報告(案)について、各委員からの意見概要は以下のとおりです。

< 2ページ >

財政的な話だけでなく、「市民との協働や参加」や「環境」についてもっと強調してもいいのではないか。

< 4ページ >

緑の基本計画は「緑」関連の法律に基づくのだろうが、1ページあたりに「みどりの定義」を持ってくるとわかりやすい。

< 7ページ >

基本理念の記述で、どの部分が「基本理念」なのか不明瞭である。また、基本理念そのものがスローガンのように感じる。

「生活にうるおいや安らぎ」の部分は文言として若干偏りがあると思う。
基本理念の説明文は非常に大事であるので、もう少し整理したほうがよい。

< 14・15ページ >

14ページの協働の担い手部分が、読み方によっては「対象」を限定しているような印象を受ける。新しい担い手をつくっていかうとしているなら、もう少し工夫が必要ではないか。

「担い手の連携」の図は、今のままではわかりにくい。3Dにするとか、現状の図では関係性がよくわからない。実際の活動はこの矢印通りにはならない。3者もしくは4者が重なり合って活動していく。
行政の役割は、市民あるいはほかの担い手と同一ではないのではないか。

< 22・23ページ >

コリドールの現状と具体的な将来イメージ、生物の移動空間、人々へのうるおいといった部分をもう少し明確にした方がいいのではないか。生物多様性、レクリエーション、防災、景観的に効果のあるコリドーとするべき。

野生動物などの移動空間確保のためにも「みどりのつながり」を強調してほしい。
指標の部分で、「コリドー」に関するもの、ネットワーク率などが必要ではないか。
単につないでいくだけでなく、どのレベルを目標にするか。最低限のつながり目標にするか、ポイント(河川、道路)ごとのつながりを目標にするか、あるいは、動物の移動にとってどういう状況か、人が利用できる形になっているかなど、「連続性」という定義をつくる必要がある。

< 24ページ >

「土地利用に合わせたみどりの創出」は「まちづくりに合わせたみどりの創出」ではないか。

< 24・25ページ >

「北国特有の色鮮やかな」という表現は、園芸種などのイメージが強くなるので、在来種との関係もあることから、誤解のない書き方に変えたほうがよい。

生物多様性に悪い影響があっては困るが、33ページで配慮されていれば問題ない。25ページでは「うるおいやにぎわいをつくり出す」といった表現にしてはどうか。

< 34ページ >

指標に「帰化植物率」を入れてはどうか。

< 36ページ >

「設置許可」や「PFI」の二つが民間資金の活用にならないので、文言を見直したほうがよい。

< 38ページ >

学校から公園までの距離などの誘致圏について、指標があってもよい。

< 39ページ >

公園は使われることが重要であることから、進行管理に公園の利用に関することがあらわれるとよい。

< 43ページ >

「方針図」という表現は適切ではない。

< 43ページ以降 >

活動事例が、新しい展開を導く形につくられるとよい。
制度・行政による支援メニューがわかりにくい。

< 77～80ページ >

評価指標にももう少し定性的な評価を入れたほうがよい。
評価については、施策・事業の実施状況の把握を行政が行い、その評価と点検を協働で行うのがよい。

< 全体 >

今回は1冊の体裁で進めていく事とするが、40ページの冒頭に39ページまでのつながりが分かる文章を加えてはどうか。

1冊にするのであれば、支援メニューを主体とした事例を示すかたちがわかりやすいのではないだろうか。
「公園緑地」「公園や緑地」と使っているが、都市施設の「緑地」としてとらえているのか、それとも一般的な広い意味の「緑地」としてとらえているのか、使い方が混同しているようにみえる。

現計画を受け継ぐものと改定してしまおうというものがあり、例えば、現計画の地域帯緑地を広げていこうという目標が消えているので、現計画とこの計画のかかわりについてもう少し説明したほうがよい。